

図 書 紹 介 ・ New publications

Current References in Fish Research. Vol. 12 (1987). Victor A. Cvancara, ed. 1988. 146 pp. A4 版. US \$ 12.20.

自分の研究に関連した文献情報はできるだけ早く、もれなく手に入れたいものだ。コンピュータ検索を利用するのが、もっとも速くて確実だが、費用がかかりすぎる。また、多数の新着雑誌にその都度目を通すことは、時間的にも労力的にも容易ではない。とくに身近に専門雑誌のそろった図書館がない場合には不可能に近い。そこで、そのような恵まれない環境にある方のために、また少し位遅れても手間のかからぬほうがよいという方のために、この本を紹介しておきたい。

すでに御存知の方も多いと思うが、これは 10 年余り前から、毎年 1 冊発行されている目録誌である。魚類に関する論文なら、分類・形態・生理・遺伝・生態・応用、等々あらゆる分野を網羅しようという方針で編集されている。この Vol. 12 には 1987 年 12 月までの 1 年間に発表された約 4,000 編の論文が収録されている。チェックした雑誌数は約 400。もちろん魚類学雑誌もその中に含まれている。

残念ながら、これには抄録はのっておらず、著者名、タイトル、雑誌名、巻号頁、発行年のみが示されている。もちろん、1) 参照した雑誌 (巻号) のリスト、2) Author Index (住所つき)、3) Key Word Index、4) Scientific Name Index が付いているので、これらをうまく利用すれば、自分の研究に関連しそうな論文をかなりの確率でひろうことができる。

ただし、巻頭にも注記してあるように、この Key Word Index は論文のタイトル中の単語だけを対象としたものなので、タイトルに内容が十分に盛り込まれていない論文は、検索からもれてしまう。また、Index における入力ミスも少なからず見受けられる。しかし、この手の情報誌に完璧を期待するのは、そもそも無理な注文だろう。少なくとも私にとっては、これらの欠点を認めただ上で、なおかつ大変便利な本である。

編者の Prof. Victor A. Cvancara (Dept. of Biology, University of Wisconsin-EC) は、魚類研究者相互に実際に役立つ情報誌を目指して、これを作られたようだ。というのは、定期的にチェックされるメジャーな雑誌の他に、ローカルな雑誌にのった論文や報告書でも、著者が別刷を彼あてに送れば、次巻にその論文も収録するというシステムがとられているのである。

Vol. 12 (A4 版, 146 頁) の価格は \$12.20。それに

日本までの郵送料として、1 冊につき船便の場合 \$2.00、航空便なら \$13.00 が必要である。次巻 Vol. 13 (1989 年 1 月刊行予定) は予定価 \$14.50 となっている。なお、バックナンバーは Vols. 1-6 は品切れだが、Vol. 7 以降は 1 冊 \$9.00-12.10 で手に入る。申込み・送金先は: Victor Cvancara, Route 1, 296 E. Hagen Road, Chippewa Falls, WI 54729, USA.

もし、至急 order form が欲しいという方がおられましたら、私の方まで御連絡下さればコピーをお送りします。なお、最近日本の洋書輸入業者でも扱っているところがあります (たとえばワコー洋書で Vol. 12 は ¥4,800)。 (桑村哲生 Tetsuo Kuwamura)

日本の淡水魚類—その分布, 変異, 種分化をめぐって— 水野信彦・後藤 晃編. 1987. 東海大学出版会, 東京. ix+244+33 pp. サイズ 15.5×21.7 cm.

本書は一口に言っても大変読みごたえのある内容の書物である。淡水魚に強い知的好奇心を持つ 19 人の研究者が、日頃の淡水魚研究の成果とその周辺の事柄をわかりやすく読者に説明し、それを納得するよう書き込んでいる。日本の淡水魚がこれほど多角的に、これほど深く総合的に論じられ、出版されたことはかつてなかった。その様な意味で、二人の編集者の努力は充分報いられ、成功したと言ってよいと思う。しかし一方、日本列島の淡水魚類は未だ十分に研究しつくされたわけではなく、サケ科魚類、フナ類、ギバチ類、ヨシノボリ類など数種の学名も決定されていず、未記載の淡水魚のいることもわかっている。一層の研究が必要とされる所以である。この様な現状を前提とし心得た上で本書を読んでゆくと興味は尽きない。

本書は五つの部からなる: I 淡水魚 (後藤 晃); II 日本の淡水魚類 (17 名); III 韓国の淡水魚類 (田 祥麟); IV 琵琶湖における魚類相の成立と種分化; V 日本の淡水魚相の成立 (水野信彦)。第二部はさらに純淡水魚 (ウグイ、タモロコ、タナゴ、ドジョウ、シマドジョウ、ギギ、メダカ、ドンコ、イサザ)、湖河回遊魚 (サケ・マス、イトヨ、トミヨ)、両側回遊魚 (アユ、淡水カジカ、チチブ、ヨシノボリ、ウキゴリ類) に分けられ、それぞれの研究者が分担執筆している。淡水魚をどのようにグループ分けして考えることができるかについて種々の学説を紹介することから始まり、生態学的、地史的、古生物学的、分子生物学的、生化学的、遺伝学的、形態学的、分岐分類学的、生物地理学的なデータをそれぞれ

の特徴と利点を巧みに生かしながら各群の系統進化をあきらかにすることを試みている。いずれの項も力作であって甲乙つけがたく、大変多くの基礎的な、また新しい情報を含んでいる。特に日本列島の淡水魚類研究のうえで欠くことのできない韓国の淡水魚相に関する田 祥麟氏の解説を得ることができたことは、今後の研究の発展を考えて素晴らしいことである。田氏はこれまで何年も韓国の淡水魚の分布をきまこまかく記録し刊行してこられた実績がある。

ここに本書の全てを紹介するわけにはいかないので、全体を概観して簡単に感想を述べてみたい。この本の執筆者は日本の第一線の淡水魚研究者の重要な部分を占める人達なので、魚種に対象を絞って書かれた第二部の各章を調べて見ると次のようなことがわかる。17名の執筆者のうち13名は分布、形態と分類学的研究を基礎として種分化に言及している。また、生態や繁殖の面を重視して論を展開しているものが5篇、アイソザイム解析を重要な手法として用いているものが5篇、染色体や核型を主とするものが3篇、化石のデータを用いたものが1篇あった。我が国の淡水魚研究において、アイソザイムあるいは分子生物学的手法が用いられることが次第に多くなっていることを示しており、種分化の解明が大きな関心を集めている。今後分布や、形態形質の解析、生態の解析に加えて細胞遺伝学的、分子生物学の解析は発生学的解析と共に淡水魚類研究の重要な面となり続けるに違いない。

系統や進化の研究は昔から一筋縄では解決ができないものとされてきた。これまでも多くの異なった分野の研究成果に基づいて進化の機構、進化の道筋が追求されてきた。しかし、一人の研究者が種々の手法を体得できるには自ずから限界がある。そこで一つの手法で徹底的に研究対象を追求するものと、幾つかの手法で追求する研究者とが生じる。研究者の性格によることも多いと思われるが、それぞれに長所と短所がある。また自分が体得した手法以外の方法で他の研究者が発表した研究結果を取り入れ結論を出す場合もあるが、この場合、解釈において適正な“感”が働かないために奇妙な結論に悩ま

されるような場合も生じる。染色体、アイソザイム、化石のデータなども基礎的な理解力を持ち、かなりの経験に基づいて使用しなければならないし、その逆はもっと危険で、対象とする魚類そのものを知らずに核型や系統を論じようとする誤りを犯しやすい。いずれにしても学生時代に多様性に富んだ手法を経験し、体得しておくことが大切なことを、本書を読んであらためて考えさせられた次第である。

先入観にとらわれることなく、客観的に誰でもわかるデータを処理するだけで結論を出したいと思う立場と、科学的体験に基づく“感”と経験を十分に活かしたいとする立場がある。これらの立場の違いによって結論に違いが生ずれば、それはどちらかが正しいか、両方とも間違っているかということになるが、一般的に両極端の立場に立つことは系統や進化を論ずる場合極めて難しい。結果に差が生じた理由を見極めて、より正しいと思われる結論へと進まざるをえないであろう。

この本を読みながら、いろいろなことを考えさせられたが、自ずから反省させられたことも多く、困難を克服しながら淡水魚類の研究をより一層高度なものにする執筆者らの努力に心から敬意を表して紹介を終わらせていただく。
(上野輝弥 Teruya Uyeno)

International Zoo Yearbook, Vol. 26. P. J. S. Olney, ed. 1987. Zoological Society of London, ix + 582 pp. B5 版. ¥39.75 (ソフトバックは ¥35.50).

3つのセクションに分かれ、Section 1では水族の展示法を特集しています。各国の専門家から寄せられた29篇の論文からなり、豊富な図を用いて最新の水族展示法や管理法を論じています。特定の動物の飼育法に関するものもあり、上野動物園水族館からはミヤコタナゴの人工繁殖法についての論文が寄せられています。Section 2は動物園界全般にわたる新技術に関する論文からなり、Section 3はreference sectionで、世界の動物園と水族館の現況、人工繁殖が行われた動物のリスト、飼育されている珍しい動物のリストなどが含まれています。

会 記・Proceedings

昭和 62 年度第 6 回役員会

昭和 63 年 2 月 5 日(金)、於東京水産大学。出席者：岩井、阿部、石山、沖山、黒沼、佐藤、多紀、谷内、富永、松浦、丸山、望月。

議事：1. 決算、予算について検討した。出版費が当

初予算より増加したことについて検討し、来年度は今年度より出版費を増額することにした。事務処理委員会からの100万円につき今年度の雑収入として組み込むことと、第3回魚類国際会議への20万円の寄付が承認された。2. 前回記録の確認をした。3. 報告事項。(庶務)日